

漢長安城の建設プランの変遷とその思想的背景

陳 力

小論の目的は、漢長安城の建設プランの変遷に対する考察を通して、前漢時代の社会思想の変遷が、都城構造に対して与えた影響を検討することにある。その検討の過程で、当然古文経と今文経の盛衰が漢長安城の構造の変遷に与える影響について述べなければならぬが、その検討は、別の機会にゆずりたい。

漢長安城の都市プランについての中国の史学界の主流な学説は、考工記アイデア説であり、その内容は漢長安城が『周礼・考工記』にある「匠人の国を営むや、方九里、旁三門、國中九經九緯、經塗九軌」という、いわゆる周代から伝えてきた営国制度によって建設されたとする説である。^①この説のほかに、近年、楊寛氏は座西朝東説を提唱し、漢長安城が「座西朝東」の古礼によって建設されたことを主張した。^②日本の学界で自然形成説、阡陌説などが主張されている。

しかし、漢長安城の都市プランが、前漢時代の二百年間でさまざまに変化し、漢長安城の性格も都市プランの変動にともなうて変化したことは、従来考察されることがなかった。

漢長安城の建設は、紀元前二〇二年から始まり、初期の建設経緯は、秦の興樂宮を基礎として長樂宮を改築した。紀元前二〇〇年に、劉邦は正式に長安に遷都し、同時に未央宮、武庫の建設を開始した。恵帝即位後、長安城の城壁が築かれ、漢長安城の基本的構造が完成された。武帝時期に至って、城内に桂宮、明光宮を増築し、城外では建章宮が築かれた。王莽時代においては、城南で明堂等の礼制建築が築かれた。

以上の過程から、漢長安城の建設は二段階に分けられる。第一段階は高祖から武帝時期までであり、第二段階は武帝から王莽時期までである。第一段階においては主に宮殿、市場などを建設し、第二段階には主に礼制建築の建設に力を注いでいた。

一、漢長安城の早期建設と陰陽五行の学

張衡『西京賦』^③に、
取殊材於八都、豈啓度於往旧、乃覽秦制、跨周法。狭百堵之側陋、増九筵之迫脅。

とある。李善注に、

裁、制也。八都、猶八方也。啓、開也。言採取八方異制、以為宮室之巧、非尊往日旧法也。跨、越也。因秦制、故曰覽。比周勝、故曰跨之也。

とある。さらに、班固『西都賦』に、^①

作洛之制、我則未暇。

とある。その李善注に、

作洛、謂造洛邑也。我、我高祖也。謂天下新造草創、不暇改作如制礼也。

とある。これらの史料によれば、漢長安城は、その建設の初期において、秦の都城制度をモデルとして、多種の都城様式を参照して造られたのである。

そして秦の咸陽は、いわゆる「考工記アイディア」に従って建設されたのでなかった。前掲『西京賦』、『西都賦』の記載は、いずれも秦国が自己独特な都城制度があることを示し、考古学的な視角から見ても、同じ結論が得られる。その詳細については、別の機会に譲りたい。

「周制」が採用されなかったことは、長安で定鼎する理由からも窺える。『史記』卷九十九劉敬傳に、

婁敬説曰、陛下都洛陽、豈欲與周室比隆哉。上曰、然。婁敬曰、陛下取天下與周室異。(中略)成王即位、周公之屬傅相焉、適管成周洛邑、以此為天下之中也、諸侯四方納貢職、道里均矣、有德則易以王、無德則易以亡。凡居此者、欲令周務以德致人、不欲依

險阻、令後世嬌奢以虐民也。(中略)陛下起豐沛收卒三千人、以

之徑往而卷蜀漢、定三秦、與項羽戰滎陽、爭成皋之口、大戰七十、小戰四十、使天下之民肝腦塗地、父子暴骨於中野、不可勝數、哭泣之聲未絕、傷夷者未起、而欲比隆於成康之時、臣竊以為不侔也。

且夫秦地被山帶河、四塞以為固、卒然有急、百万之衆可具也。

とある。これによれば、早くも前漢の創立者は都城の場所を選ぶとき、すでに周の都城建設の伝統を捨てて、新しい道を選ぶほうとしていた。

新都の建設の最高責任者は蕭何であるが、具体の建設活動を指揮したのは秦の軍匠であった陽城延である。^②

『漢書』卷十六高惠高后文功臣表に、

梧齊侯陽城延、以軍匠從起郟、入漢、後為少府、作長樂、未央宮、築長安城先就、侯。

とある。前掲『西都賦』に、

是以西匠營宮、目習阿房。

とある。これらの文献は、秦の軍匠の陽城延が、咸陽をモデルにして、長安城を築くことを示しているが、咸陽の建設は陰陽五行説と密接な関係があった。蕭何について、『史記』卷八高祖本紀正義に、
未央宮雖南向、而當上書奏事謁見之徒皆詣北闕、公車司馬亦在北焉。是則以北闕為正門、而又有東門、東闕、至於西南兩面、無門闕矣。蕭何初立未央宮、以厭勝之術理宜然乎。

とある。この記載によってこの時点で、漢長安城の建設は周制に影響されたというより、陰陽五行の都城建設理論に影響されていたと

判断される。『西都賦』にも、

其宮室也、体象乎天地、経緯乎陰陽。拋坤靈之正位、傲太紫之圓方。

とあり、『西京賦』には、

正紫宮於未央、表饒闕於閭闔

とあり、漢長安城が陰陽五行説により企画されたことを示している。

考工記アイディア説によれば、漢長安城は『考工記』にある

「匠人営国、方九里、旁三門、國中九經九緯、経塗九軌、左祖右社、面朝後市。」によつて建設されたことになるが、前掲した漢長安城に関する史料から、『考工記』の内容と合致する点は見あたらぬ。次に、長安城の状況と考工記アイディア説の諸論点を比べて分析したい。

まず、「旁三門」について検討したい。漢長安城に確かに、東西南北、それぞれ三つの城門があつたが、これらは営国制度には関係はなく、陰陽思想中の十二支配置より、このような城門配置を採用されたのである。漢長安城の城門名がこの事実を示している。

『三輔黄圖』卷一都城十二門条に、

長安城東出南頭第一門曰霸城門、民見其色青、名曰青城門。

長安城東出第二門曰清明門。

長安城東出北頭第一門曰宣平門。

とある。さらに同条に、王莽時期の城門名については、

(霸城門) 王莽更名曰仁寿門無疆亭。

(宣平門) 王莽更名曰春王門正月亭。

(安門) 王莽更名曰光礼門頭樂亭。

(厨城門) 王莽更名曰建子門広世亭。

(西安門) 王莽更名曰信平門誠正亭。

(章城門) 王莽更名曰萬秋門億年亭。

(雍門) 王莽更名曰章義門著義亭。

とある。漢長安城東の城壁南から一番目の城門は青門とも呼ばれる。五行学説によれば、東方が木に属し、その色は青色であり、ゆえに門に青色をつけられ、青門とも呼ばれる。

清明門は東の城壁の中部にあり、その名は二十四節気の清明から得り、五行説によれば、清明節の位置は東方の中部にある。

東の城壁三番目の城門は宣平門であり、この門の位置は十二支の寅の位置にある。『五行大義』によれば、木は性が平和条直であり、不殺の意味がある。ゆえにこの位置にある門が宣平門と名付けられたのであろう。

王莽の居撰時期まで、漢長安城の城門の五行意義は変わらなかった。寅位に位置する宣平門は王莽時期に春王門正月亭と名付けられ、正月が寅に建ち、これはこの位置にある門が春王門正月亭と名付けられる原因である。北城壁の中部にある城門は、王莽時代には、建子門とも呼ばれたが、この門は十二支の子の位置にあたるためである。そのほか、前掲した信平門などは一つ一つの説明を省略するが、いずれも五行十二支の学説に関係がある。^⑥

第二に、考工記アイディア説に関わる「左祖右社」について分析したい。文献中、前漢諸帝の廟について、次のような記録がある。

高廟在未央宮、長樂宮間。

〔漢書〕卷四三

惠帝廟在高廟後。

〔三輔黃圖〕卷五

文帝廟在長安城南。

〔漢書〕卷四文帝紀

武帝廟在茂陵東。

〔三輔黃圖〕卷五

宣帝廟在杜陵西北。

〔西漢會要〕宗廟

以上の史料からみれば、前漢時期に、祖廟制度は未だ形成されていなかった、といえるであろう。『漢書』卷二七五行志と『漢書』卷七三韋賢韋仲子玄成傳にみえる「古之廟制皆在城中、孝文廟始出居外」も、前漢時期における廟制の未整備を示唆している。

以上で考工記アイデア説中の疑問点に対する検討を通じて、次のような結論が得られるであろう。

漢王朝の創立者は都城問題を考え始めたとき、周から伝えてきた都城制度を否定したのである。『考工記』は、漢長安城の建設に影響を及ぼすことはなかった。この時期の漢長安城の構造に直接的に影響を及ぼしたのは、経済活動ではなく陰陽五行思想であった。

漢代の前期において、陰陽五行思想で都市建設を指導するのは当然の事であったといえる。『史記』卷六秦始皇本紀に、

史官非秦記皆燒之。非博士官所職、天下敢有藏詩、書、百家語者、悉詣守尉雜燒之。有敢偶語詩書者棄市。

とあるように、儒家を含む百家の学説の伝承は厳しく禁止されていた。さらに、秦漢の際の戦火により、百家の伝承は「絶えず一糸の如き」と言われる。秦火の難にあわなかったのは医薬卜筮種樹の書籍だけであった。今まで発見された前漢初期の木簡帛書資料はこの

四

範囲を超えるものはない。陰陽家の説は医薬卜筮種樹などの陰陽に関わる諸書によって保たれてきて、漢代初期社会思想のもっとも大きな源となり、漢代の社会思想に強く影響し、黄老思想もその影響を受けた。周知の通り、前漢前期において「黄老之学」は主流的な社会思想で、支配層にも一般民衆にも強く影響を及ぼした。「黄老之学」の中心的思想については、「虚」、「因」、「静」とまとめられていたが⁷⁾。しかし、「馬王堆文書」からみれば、黄老の学は、老荘の学と差異があり、その中心は「虚」、「因」、「静」ではなく、陰陽五行説に基づき、主な内容は陰陽五行説における相生、相克理論により、反対面を压制し、目的を達成させる内容である⁸⁾。

陰陽五行的な都城建設思想はすでに戦国時期に形成され、戦国時期の都城構造にも影響を及ぼしていたのである。『呉越春秋』卷四に、

立閭闔者、以象天門、通閭闔風也。立蛇門者、以象地戶也。閭闔欲西破楚、楚在西北、故立閭門以通天氣、因復名之破楚門。欲東並大越。越在東南、故立蛇門以制敵國。呉在辰、其龍位也。故小城南門為兩鯢、以象龍角。

とある。その内容に十二支での定位と「法地象天」の陰陽家の内容がすでにそろえていた。これによれば、呉都は陰陽五行説に基づき、建設されたのである。そして秦の咸陽にも同じことを指摘できる。

『三輔黃圖』卷一に、

始皇窮極奢侈、築咸陽宮、因北陵宮殿、端門四達、以則紫宮、象帝居。渭水貫都、以象天漢、橫橋南渡、以法牽牛。

とあり、陰陽五行的な都城建設思想の発展を示している。

前漢に至って、このような陰陽五行的な都城建設思想は黄老の学の一部分になった。未央宮の建設にしたがわれた「厭勝の術」も黄老之学に属すべきだとおもわれる。

一方、経済活動が漢長安城に対する影響は強く働いていたとは言えない。この点は漢長安城の市場の状況から明確に見ることができ

る。

『漢書』卷二惠帝紀に
起長安市、修倉。

とあるが。これは漢長安城の市場の初見史料である。西市の位置は考古発掘によって、未央宮の北側、横門の内側にあることが明らかになった。⁹⁾

『史記』卷八高祖本紀索隱に、

秦家旧処皆在渭北、而立東闕、北闕、蓋取其便也。

とある。秦王朝が滅ばされた時、宮室建築が破壊されたが、「其の便を取る」とは、いうまでもなく「宮室の便」ではなく、市場、手工業工場などの施設の便利であった。考古発掘によれば、秦の手工業、商業区は秦咸陽城の西、渭水河岸にある。¹⁰⁾『三輔黄圖』卷二長安九市条に、

直市在富平津西南十五里、則秦文公造。

とあり、『長安志』に、

直市在渭橋北、秦文公造。

とあり、¹¹⁾漢長安城十二市の中に数えられる直市が秦からひきうけるものということは甚に明らかである。『漢書』卷七六韓延寿傳に、

延寿竟棄市、吏民数千人送至渭城。

とある。「渭城」はすなわち秦の咸陽であり、『七国考』引く『洪範五行伝』に秦の惠文王四年に「狼は咸陽市に入る」の記事がある。

これらの史料は秦の咸陽城に位置する市場が秦人に建設され、その市場施設が漢代の人につがれたことを示している。

さらに、『三輔黄圖』卷二引『廟記』に、

長安市有九、各方二百六十六步。六市在道西、三市在道東。凡四里為一市。致九州之人在突門。夾横橋大道、市樓皆重屋。

とある。横橋大道の両側にある市場は直市の南にあり、両者の間は渭橋でつながり、横橋大道の市場は、直市の拡張部分と考えられる。右の諸史料を見れば、漢代の主な市場は、秦のそれをそのまま引きつぎ、あるいは秦のそれを拡張して形成したものと判断してよいであろう。

二、漢長安城の後期建設と儒教の成立の関係

武帝時期を境として、漢長安城の建設に変化が起きた。武帝時期に新しい宮殿の建設と同時に、礼制建築の計画も開始されたのである。

武帝時期の宮殿建設活動をみれば、それは陰陽五行とは密接な関係があると見える。『漢書』卷六武帝紀に、

(元封二年) 作甘泉通天台、長安飛廉館。

とあり、その應劭注に、

應劭曰、神禽能致風氣者也。

とある。さらに、同上武帝紀に、

(元封六年)二月、起建章宮。

とあり、その文類注に、

文類曰、越巫名勇、謂帝曰、越国有火災即復大起宮室以厭勝之、故帝作建章宮。

とある。「風氣」、「厭勝」はいずれも陰陽五行説に深く関わるものである。これらの記載によれば、武帝時期に長安で行われた新しい建設は陰陽五行学説に密接の関係がある。

礼制建築に関する理論的な準備も武帝時期に始まったのである。

『漢書』卷二五郊祀志に、

武帝初即位、尤敬鬼神之祀。漢興已六十余年矣、天下艾安、縉紳之属皆望天子封禅改正度也、而上向儒術、招賢良。趙綰、王蔵等以文学成公卿、欲議古立明堂城南、(中略)太后不好儒術、(中略)諸所興為皆廢。

とある。この記載によれば、武帝即位以降、儒家の礼法にしたがって都城を改築する構想があった。この意見を出した「縉紳」たちはいずれも黄老学派に属せず、儒家学派に属する「文学の士」である。このような「文学の士」の都城改造計画は、黄老を好む竇太后の死後、まもなく実行された。

上述した武帝時期の二つの都城建設の特徴、即ち、陰陽五行と儒教的な建設活動の共存は興味深い。この時期は、原始儒家学説が儒教に変身する時期であり、新しく成立した儒教のもっとも著しい特徴は陰陽家学説の吸収である。¹²⁾武帝時期の都城建設活動特徴はこの

思想変革の反映であると思う。

武帝時期の都城建設の論争における「縉紳」と太后の対立に関する史料から、漢長安城の南郊が注意されるようになったことがうかがえる。これは新都城建設プラン誕生の兆しであろう。

昭帝、宣帝時期の儒教の不採用によって、成帝時期まで、定格的な新都城プランは形成していなかった、新しい都城建設プランの形成は元帝、成帝時期以降のこととおもわれる。封建都城建設にもっとも重要な建築、宗廟、天地を祀る郊祭の制度が定められ、実際の建設も行われた。『漢書』卷十成帝紀に、

建始元年十二月、作長安南北郊。

二年春正月、上始郊長安南郊

とあり、成帝時期郊祀制度の成立と示唆している。

王莽時期に長安で行われた建設は九廟、明堂、壁雍、靈台、学者舎、市場などがあげられる。『漢書』卷九九王莽傳に、

是歳、莽奏起明堂、辟雍、靈台、為学者築舎萬区、作市、常滿倉、制度甚盛。立『楽経』、益博士員、經各五人。征天下通一芸教授十一人以上、及有逸『礼』、古『書』、古『書』、『毛詩』、『周官』、『爾雅』、天文、図讖、鐘律、月令、兵法、『史篇』文字(下略)。

とある。逸『礼』、古『書』、『周官』はいずれも古文経に属す。この記載によれば、王莽時期の礼制建築の建設は古文経と関係はないとはいえないであろう。王莽九廟の建設は古文経の都城建設思想の都市建設における具体的な運用である。王莽九廟の建設によって、西安門、前殿、北闕、横門によってなる長安城の軸線が形成し、官社

官樓と王莽九廟はこれを挟み、漢長安城は「面朝後市、左祖右社」の構造に変身し、これは古文経に属す『周礼』の影響によるものには違いない。

右の検討によって、漢長安城の第二段階の建設について、次のようにまとめられると思う。

武帝時期に、原始儒学から儒教への変化より、陰陽五行説が儒教思想体系に融合した。東周時期から伝えてきた陰陽五行都城建設思想は次第に儒教化され、変容してきた。明堂、社稷、宗廟等の礼制建築は都城建設の中心になって、都城のプランにたいする考えもこれを応じて変わられた。城南の位置は重視され、都城建設の重点になった。昭帝、宣帝時期儒教地位の下落によって、都城プランを変わる實際行動は少なかったが、元帝、成帝時期に漢長安城の建設プランは次第に南が重心になりつつあった。漢長安城の南への建設重心の移転と社稷、宗廟の建設によって、儒教經典にあう都城プラン、すなわち「面朝後市、左祖右社」の都市構造が形成されたのである。これは古文経学の発展と密接な関係がある。

むすび

以上の検討によって、次のような考えが得られるとおもう。

その一は、漢長安城は動態的な構造であった。前漢王朝のはじめ、漢長安城は「黄老之学」を基準として建設された。武帝時代以後、儒教の地位の上昇にしがたがって、城南の位置が重視され、王莽時期にいたって、最終的に「考工記」式の都城になった。その変化をも

たらしめた要因は思想的な要素以外は考えられないとおもう。

その二に、漢長安城都城プランの変化は漢長安城都市の性格変化を示唆している。前漢初期の長安城は、東周時期の都城と相似した性格をもっていると思われる、その建設思想は戦国時代の都城建設思想を引きついでたものであった。武帝時期以降、都市建設の中心は礼制建築に移っていった。しかし、この時、漢長安城の構造をみると、その経済施設はすでに十分だから、経済施設の建設は停止されたとはいえない。それは漢長安城が純政治的な都城に変身することを示唆していると思う。

その三に、漢長安城構造の変遷に、直接影響を及ぼしたのは統治者の世界観である。逆に経済的な影響は弱かった。このことから、統治者たちの都城建設思想が窺えるとおもう。いわゆる都城建設思想とは、都城が如何なるものであり、如何なる原則のもとに建設すべきか等に関する思想である。簡単にいえば、前漢時期の統治者の都城建設思想において、都城は皇帝と天の接点であり、君統の正統性を示すところであり、礼を行うところであり、施政の場所、即ちまつり場であった。この思想は東周時期の主流的都城建設思想とかなりの違いがあると考えられる。

第四に、前漢長安城建設プランの変遷は、前漢時期の主流的な社会思想の発展の動きと一致している。武帝以前の統治者は黄老の術が主流的な社会思想なので、漢長安城のプランには無為、即ちできるだけ残存している秦の市政施設を利用する傾向と陰陽五行説による構造特徴が見える。武帝時期に儒教の成立によって、礼制建築が建

設され始めてきた。今文経で都城、礼制建築の問題を解決できないのため、成帝以前の建設は系統的な建設とはいえなかった。王莽時代、古文経の台頭によって、都城建築制度の問題は経学で解決され、漢長安城に再び大きな変化が起きたのである。

注

- (1) 王仲殊 『漢代考古学概説』(中華書局、中国社会科学院考古研究所編、『新中国の考古発見と研究』(文物出版社)を参照。
 (2) 楊寛 『西漢長安城布局結構の探討』(文博、一九八四年創刊号)、『西漢長安城布局結構の再探討』(考古、一九八九年四期)、『文選』卷一。
 (3) 同上卷一。
 (4) 林劍鳴 『秦漢史』(上海人民出版社、一九九三年)第六章第二節注

- (6) 二を参照。
 (7) 五行、十二支理論と方角、五徳等の関係について、『五行大義』及び、龐朴 『五行漫談』(『文史』三九輯 中華書局)を参照。ここで贅言しない。
 (8) 張維華 『西漢初年黄老政治思想』(『中国社会科学』一九八一年五期)。
 (9) 唐蘭 『馬王堆出土老子乙本卷前古逸書の研究』(『考古学報』一九七五年一期)、『経法』、『称』(いずれも文物出版社)などを参照。
 (10) 劉慶柱 『漢長安城布局結構辯析』(『考古』一九八六年十期)。
 (11) 王学理 『秦都咸陽』(陝西人民出版社、一九九〇年)。
 (12) 直市の位置について、陳直 『三輔黄图校証』(陝西人民出版社一九八〇年)に詳細な考証がある。
 (13) 李沢厚 『秦漢思想簡議』(『中国社会科学』一九八四年二期)を参照。

(一九九五年十月六日受理)